１２月総評

西躰かずよし

パフェグラスの底に残った
銀色のスプーンはそっと光を掬う

飛和　　長野県

スプーン自体がひとつの生きもののように見える。光はちいさな救いにつながるのかもしれない。喫茶店で生まれた、ひとときの休息。

働けば豊かに暮らせた東京の
カプセルタワーのあとの空白

藤井　柊太　　神奈川県

「働けば豊かに暮らせた」という一節が、ほろ苦い。喪失を感じるのは、かつてそうであったはずのものが、そうでなくなるからなのかもしれない。

秒針の
かち と かち のくうげきで
からだがたまに浮きそうになる

雲理そら　　大阪府

この書き手のいる場所は、すこしだけ空気がうすいところのような気がする。だからだろうか、ことばがとてもきれいに聴こえる。そんなものはないと分かっているけれども、もし清潔なことばというのがあるなら、この書き手の書くものが、それなのかもしれない。

他の作品に「まわってるおもちゃの／馬たちにまたがる、もう／たたかわなくてもいいひとびと」「もみじがり ／いちごがりがりことばがり／いまから／あかいことばを消します」というのがあるが、いずれも魅力的な作品。

夜はずっと変わらないけど

誰かは星になっている

杉本　太　　北海道

ありがちな設定といって馬鹿にしてはいけない。ありがちなことがそのまま伝わるなら、それが一番いい。「誰か」に夜の希望のすべてがたくされる。きっと、その星はいつまでも輝き続けるに違いない。

フルートの
高いラみたいな冬うらら

花野　木春　　東京都

フルートの高いラの音は、寒いなかの澄み切った晴天によく似合う。もし、冬うららが、音そのものから生まれてくるのなら、そんな瞬間に立ち会いたいとも思う。

売切の文字が五つも光ってて
カシオペヤ座に見える自販機

亀井　　千葉県

自販機の売切れの文字が星座に見えたという。それだけのことなんだけれども心がやすらぐのはどうしてだろう。僕たちが夜に見るのは、代わり映えのしない自販機であったり、家並みだったりするのだけれど、そうしたなかにも星座は見つかることはあって、そんな希望にも似た何かを作品のなかに見つけるからなのかもしれない。

北風に置いてきぼりのヘルメット

うたた　　岡山県

置いてきぼりのヘルメットにどうしようもなく感情移入する。かつて置いてきぼりになったことがあるからかもしれない。もしかするとそうではなくて、僕は置いてきぼりのままなのかもしれない。いつからこのヘルメットは置いてきぼりなのだろうか。

雪の原血液型を教えあう

吉沢　美香　　宮城県

「雪の原」には、美しいけれども暴力的な印象がある。それは場合によっては何人ものいのちを奪う力を持っているからだろう。そこに描かれる血液型を教えあうという牧歌的な情景。いのちも危ぶまれるようなところにいるにもかかわらず、とりとめもないことを教えあう。その滑稽さはどこか人生と似ている。

ひもとひふはにている
よるがながい

立花ばとん　　東京都

緻密に構成された作品。この「ひもとひふはにている」という述懐は、ある意味、常軌を逸していて、それが作品の魅力のひとつにもなっている。長い夜に呟くには、あまりにも意味を喪失してしまっている述懐。同じ書き手の「ごはんつぶのひ／と／つひ／と／つ　がふゆっていう」という作品にも惹かれる。

どちらの作品も根源的な表現へと迫っている。ぎりぎりの表現の追求といっていいだろうか。たとえば収容所における呟きのような。

振り払うための

かたちを保てない
波浪のような　にんげんのうで

さいう　　愛知県

むきだしの人間を描こうとしているかのようである。人間の強さと脆さを同時に表現しているようにも見える。

ピアノさぼった僕を
殴る母
ねぎのにおいがした

長谷川柊香　　宮城県

母にまとわりつくねぎの匂いが衝撃的で、ほんとうは同じ書き手の「雪の声シェパードの耳動く」といった作品の方に惹かれるのだけれども、この作品のリアリティーには有無を言わせないようなところがある。そこに母親の愛情のおそろしさを垣間見るような気がする。